

# Editor's eye

・特集・

## ウイルス性皮膚疾患 アップデート

編集担当 馬場 直子

新型コロナウイルスによるパンデミックが始まって2年以上が経過したが、世界中の研究者が英知を結集してもいまなお苦戦を強いられている。コロナ以外も含めて最近のウイルス関連の症例報告を集めてみると、多くの新たな問題点や教訓が浮かび上がってくる。

単純ヘルペスウイルス感染症の検査法は複数あり、検査結果の解釈に悩むことがあるが、DNA診断と抗体価の意義についての「研究」では、各検査法の特徴と限界がよく理解できる。近年では珍しい地域での小流行がみられた水痘は、ワクチンによる免疫存在下に野生株に感染したbreakthrough水痘と思われ、水痘ワクチンは完全には発症を予防できず、また将来の帯状疱疹発症の可能性もあることが「統計」で示唆されている。

「臨床例」では、帯状疱疹に合併する腹筋麻痺や脊髄炎の報告があり、まれではあるがこのような合併症がありうることを念頭に置いて診療しなければならないという教訓が得られる。ヒトパルボウイルスB-19に成人が罹患すると多彩な臨床症状を呈することが知られているが、菊池病の病態を誘導し、その後全身性エリテマトーデスを発症したという症例も興味深い。また、その逆に膠原病のためにステロイドや免疫抑制剤で治療中の患者はウイルス感染しやすく、尖圭コンジローマとbowenoid papulosisを合併したという例もある。このようにウイルス感染症と膠原病は相互に深く関連していることを念頭に置かなければならない。

いま、注目を集めているCOVID-19関連ウイルス性発疹症であるが、本邦での皮疹の報告はいまだ少なく、欧米で多いとされる凍瘡様皮疹ではなく紅斑丘疹型の皮疹が多いことが報告されており、体幹に多発する鮮やかな不整形環状紅斑を呈した症例は印象的である。手足口病は2021年も流行が予想される年であったが、新型コロナウイルス感染対策のために通常流行する夏季にはほとんど患者がみられなかった。現在のコロナに対する感染対策により、他のウイルスに感染する機会を失った年齢層が成人したときに、また新たな現象が生み出されることも予想される。ウイルスと人との攻防は永遠に続き、さらに種々のウイルス間や、ウイルス以外の疾患とも相互に影響し合うと思われる。ウイルス感染に伴うさまざまな皮膚症状について熟知し、早期診断し、即座に感染対策を講じ、さらに合併症や併発疾患など今後おこりうる病態を予想することも皮膚科医の務めだと今回の特集を通して痛感した。